

水産・海洋系高等学校における戦前の実習船教育史
—福井県小浜水産高校等学校を例として

History of Training Ship Education at Fisheries and Marine High Schools
: Taking Obama Fisheries High School, Fukui Prefecture as an Sample

小坂康之(福井県立若狭高等学校)

Yasuyuki Kosaka (Fukui Prefectural Wakasa High School)

【要約】

福井県立若狭高等学校海洋科学科の事例を元に、水産・海洋系高等学校における戦前の実習船教育史の一端を明らかにすることを目的とした。本稿により、水産・海洋系高等学校における戦前の実習船教育を「実習船教育黎明期」、「沿岸漁業実習期」、「遠洋漁業実習黎明期」、「戦時下の沿岸漁業実習期」と区分した。特に戦前の航海実習においては小型の帆船を用いた日本沿岸、韓国や樺太地域の航海を中心とし、漁業実習は、巾着網や刺し網など沿岸域での漁業中心に実施していたことを明らかにした。さらに遠洋漁業実習黎明期においても地域の漁業の振興を重視していた点を明らかにした。

【キーワード】

水産・海洋系高等学校, 戦前, 実習船教育の歴史

I はじめに

水産・海洋系高等学校における実習船教育における歴史的変遷について、佐々木らは、実習船教育の変遷を躍進期、後退期、停滞期、多様期に定義した。躍進期(1950年代以降)は、産業教育振興法が成立し、国庫補助金による大型実習船を充実することが可能となり全国各地の水産高校でマグロ延縄実習が開始された。後退期(1970年代以降)は、オイルショック、200海里漁業専管水域体制により、遠洋漁業の規模が縮小したが、遠洋マグロ延縄漁業実習は継続された。停滞期(1990年代以降)は、大学進学率の上昇と普通科志向、地方における少子化の進行によって水産高校進学者が減少した。現在へとつながる多様期

(2000年代以降)は、海技士資格を生かせる就職先が漁船から内航商船へと大きく変化し就職先の多様化が進み、産業界の現状と将来を見据えた新たな検討の必要性を示した¹⁾。

しかし、1940年代以前のいわゆる水産・海洋系高等学校における戦前の実習船教育の歴史については、ほとんど報告がないのが現状である。さらに、多様期である現在は、遠洋漁業を中心とする実習船教育から各都道府県の水産業の状況に合わせた実習船教育が模索されており^{2) 3)}、水産・海洋系高等学校における戦前の実習船教育の歴史を明らかにすることは、今後の水産・海洋系高等学校における実習船教育を模索していく上で非常に重要な知見となる。

そこで、本稿では、福井県立若狭高等学